

遠隔授業 ガイドブック

ーハイフレックス型ー

P1. ハイフレックス型授業とは
P3. 授業の進め方
P4. 授業の準備
P5. 教育効果を高めるために

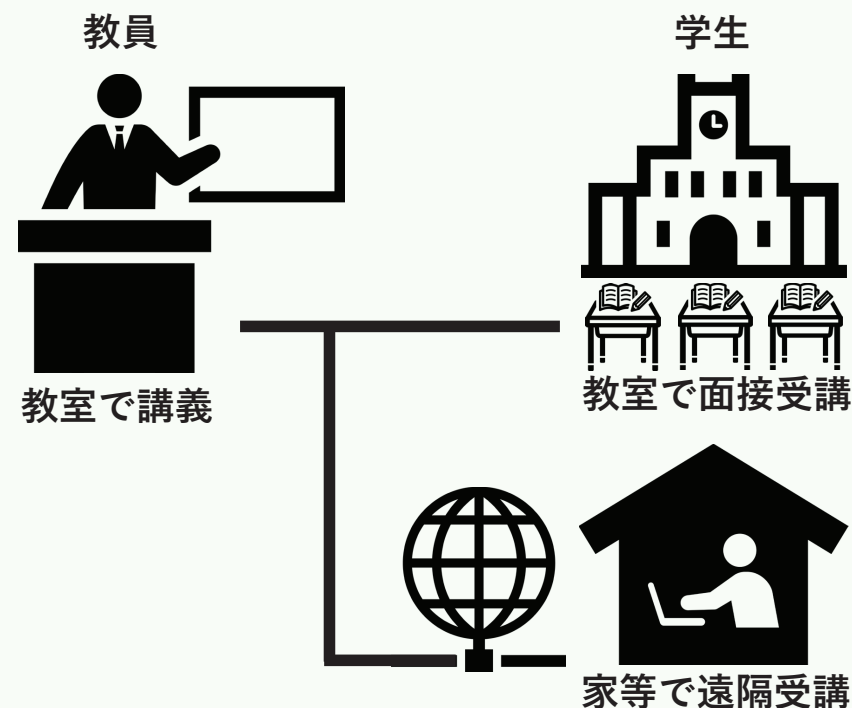
中京大学
教育推進センター

発刊：2022年4月1日

ハイフレックス型授業とは

ハイフレックス型授業とは、オンライン会議システム等を通じて**面接授業を同時双方向で中継する**授業形態です。

※同時双方向：オンライン上で教員と学生がリアルタイムに反応できる状態



特徴

面接と遠隔両方の学生を受け入れられるため、3つのパターンを持っています。

- ・原則面接授業として、**配慮が必要な学生を遠隔で受講させる**
- ・原則遠隔授業として、**面接授業を希望する学生のみ教室で対面する**
- ・原則面接授業として、**回により面接と遠隔の学生を入れ替える**

ハイフレックス型授業とは

教室の構図例



教員用PCの役割

- ・ 資料提示
- ・ 遠隔受講学生の様子見
- ・ 教員を映すカメラ



グループワークなどで遠隔の学生と交流するためのPC



学生用マイク
または集音マイク

典型的な教材

面接と遠隔の学生に差が出にくい教材

- ・ **板書を利用せずに授業を行える** スライド
- ・ デジタル資料書き込み用の教員タブレット

面接と遠隔の受講者が交流できる教材

- ・ グループでの資料作成が必要な課題
- ・ 各学生の課題の回答などをまとめた資料

授業の進め方

つい目の前の学生を見がちですが、遠隔の学生が参加できるように、双方への意識が重要です。



<グループワーク>

遠隔の学生が参加できていますか？



- ・ 遠隔の学生が少ない場合も、BYODを活かして教室の学生と交流できるようにしましょう
- ・ 学生の資料作成などをデジタルに統一することもひとつの方法です



<質疑応答>

チャット等で質問を受け付けていますか？



遠隔の学生は教室の様子が伺えず、質問のタイミングが分からないことがあるため、チャットでも質問が受け取れるようにしておくといでしょう



<平常点>

受講者が公正に評価されていますか？



発表の指名が面接受講者に偏ったり、逆に遠隔の学生だけチャットで発表可など、受講者が公正さに疑問を持つ状況はなるべく避けるようにしましょう

遠隔の学生数や個人の特性はありますが、教室にいてもいなくても「**同じ科目の履修者**」です。

ただ教室を「中継する」のではなく、面接と遠隔の「両方に授業をする」ことが学生参加につながります。

授業の準備

理想的な2つのポイント

① 授業形態を学生に周知する



面接受講 遠隔受講

学生が自身の受講形態に迷わないように**受講形態の振り分けや条件などについて事前の明示**が必要です。

配慮が必要な学生には、必要に応じて別途対応をしてください。

② 専用の教材を作成する



受講形態が違う学生間でも学習の差異を小さくするため、

- ・ **スライドによる授業**
- ・ **オンラインでのグループワーク**

ができるよう、なるべく公平性のある教材が必要です。

※オンライン授業ガイドブック「リアルタイム型」のポイントも参考にさせていただきます

教育効果を高めるために

受講形態ごとの進行度に差を減らすため、通常の授業よりも踏み込んだ工夫が理想的です。

① 授業専用の教材を配付する



学生ごとに受講環境が違うため、時には同じ内容でもそれぞれ専用の教材が必要です。

② 提出された課題にフィードバックする



受講形態で理解度に差が出ることがあります。課題で理解度を把握してフィードバックをすることで、進行度を揃えやすくなります。

③ 遠隔と面接受講者が交流できる機会を持つ



遠隔と面接の受講者が混ざったグループワークや発表会を行うことでより参加度に差が出にくくなります。



遠隔授業 ガイドブック

—ハイフレックス型—

中京大学教育推進センター